

清末小説から 101

2011.4.1

呉禱の漢訳ゴーリキー(上).....樽本照雄 1

《沙場歸夢》の原作.....渡辺浩司 7

从“文界上乘”人物“王晋庵”说起.....刘 德隆15

晚清小説作者掃描(貳拾陸).....武 禧19

夏瑞芳暗殺事件の犯人.....樽本照雄21

清末小説から24

陳建功主編『唐弢蔵書・凶書総録』(2010)、あるいは王鑫「《晚清小説目録》指瑕」(2010)などが発表されています。そろそろ『清末民初小説目録』を改訂刊行する時期でしょうか

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

訳の例をあげていて具体的だ。以前に翻訳して引用した。本稿に関係するからもう1度示す。

呉禱の漢訳ゴーリキー(上)

樽 本 照 雄

早期のロシア文学翻訳家のなかで、呉禱のレールモントフ、チェーホフおよびゴーリキーについて、陳嘏のツルゲーネフについて、包天笑のチェーホフについては、みな相当に成功をおさめている。また、呉氏は最も早く白話を用いてロシア文学の名著を翻訳した訳者であり、ロシア文学の影響を拡大した点において一定の作用をおよぼした。しかし、馬君武にせよ呉禱にせよ多かれ少なかれ当時の翻訳方法の影響を受けており、原作を書き換えあるいは手を加えることがとても多く、ある翻訳はほと

呉禱の訳例から

陳建華『20世紀中俄文学関係』(上海・学林出版社1998.4)がある。清末民初を含めたロシア文学翻訳について説明した専門書だ。その「第1章清末民初的中俄文学関係」において、呉禱の翻訳に触れた箇所が見られる。1カ所だけだが、翻



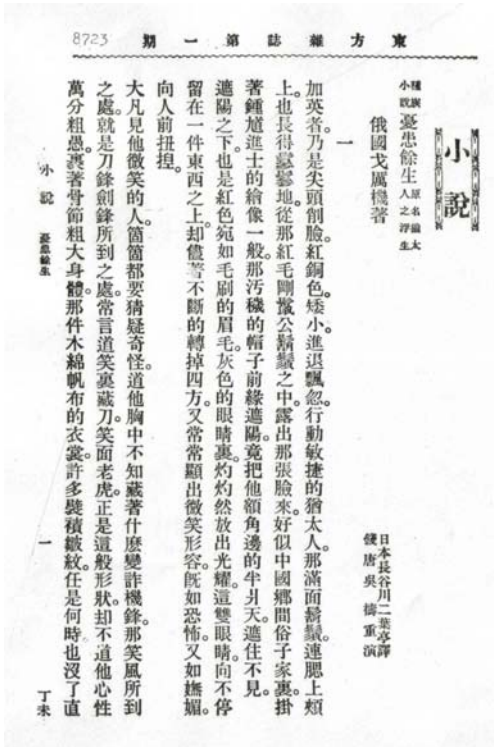
んど翻案したものまでである。たとえば、呉禱が訳したゴーリキー「憂患余生」の冒頭には、人物の容貌について描写をしたあと、次のような文章が出てくる。「まるで中国の田舎の家庭にかかっている鍾馗さまの絵図のようである」というところからその随意性を窺うことができるのだ。46-47頁

陳建華は、呉禱が漢訳するにあたり原作を勝手に書き換えたといっているのかわらない。もとがロシアの小説なのだ。中国の家庭に見られる鍾馗の絵図がでてくるはずがない。こう強調して呉禱の翻訳をおとしめた。まるで呉禱の翻訳全体がそういう調子であったかのような印象をあたえる。

小さな指摘を取り上げて論じていると思われるかも知れない。だが、呉禱の翻訳について具体例をあげて検討する、または紹介する論文は多くはない。さらには、呉禱訳の1カ所をもって彼の漢訳全体を否定的に扱っている。陳建華の説明は妥当なのか。まず、そこを問題にしたい。

呉禱がもつづいたのは日本語訳だ。長谷川辰之助(1864-1909。筆名は二葉亭四迷)*1の日本語訳を次に引用する(くりかえし記号は文字になおす。引用は全集本によった。初出の全ルビとは異なる)。

【二葉亭】カインは^{すげあたま}窄頭の、^{やせこ}頬の^{しゃくどういろ}赤銅色の、^{ちツげ}矮小な、



進退の敏捷い猶太人である。頬にも顎にも鬚々あごむしやむしやと生えた、赤毛の剛鬚こわひげの中から顔を出してゐる所は、縫れた古フラシテンの枠の中から竊そつと浮世を覗いてゐる絵像、ト見立てれば、彼の薄汚れた帽子の眉庇まびさしは差詰め其額縁の天にならうといふもの。221頁

ルピをつけて引用したのは、二葉亭が漢字にべつの読み方をふるという特色のある翻訳方法を採用しているからだ(以下ルピは省略)。

フラシテン(フラシ天、plush)は、ピロードの1種。毛長ピロードとも。ユダヤ人カインの容貌を描写してひげ面をピロードの額縁に見立てたというわけ。

それを呉禱は、以下のように漢訳した。

【呉禱】加英者。乃是尖頭削臉。紅銅色。矮小。進退飄忽。行動敏捷的猶太人。那滿面胡鬚。連腮上頰上。也長得鬚鬚地。從那紅毛剛鬚公胡鬚之中。露出那張臉來。好似中国郷間俗子家裏。掛着鍾馗進士的絵像一般。那汚穢的帽子前縁遮陽。竟把他額角辺の半片天。遮住不見。1頁

カインは、とんがり頭の顔の瘦せた、赤銅色のちっばけな、ふるまいのとらえどころのない、行動の敏捷なユダヤ人である。顔中ヒゲだらけで顎にも頬にもムシャムシャと生えている。赤毛のこわいヒゲの中から顔を出しているのは、

まるで中国の田舎の家庭にかつている鍾馗さまの絵図のようである。その汚れた帽子のへりは日を遮り、彼の額の半分もさえぎって見ることができない。

問題の鍾馗さまうんぬん部分は、二葉亭訳の「縫れた古フラシテンの枠の中から竊と浮世を覗いてゐる絵像、ト見立てれば」に該当する。

原文にない鍾馗を加えたから、厳密に言えば呉禱の誤りということになる。鍾馗が出てきたので、その後続く帽子のへりについて、描写が異なってしまった。二葉亭訳が額縁の天にこれも見立てた箇所だ。呉禱訳では帽子のへりそのものの説明にした。日本語原文から、すこし離れる結果となった。たしかにこまかい部分ではある。

呉禱は原文のフラシテンを含めて鍾馗の絵図に置き換えた。もともとが「見立て」なのだから、鍾馗に置き換えた方が中国の読者にはわかりやすいという判断があったのだろう。日本語原文には存在しない「中国」と「鍾馗」ではあるが、それを出した方がカインの容貌を瞬時にして理解できるという利点を優先したと考える。余計な加筆であるとするのは陳建華だ。しかし、それによって物語が原文から大きくはずれた、というものでもない。呉禱訳のこの部分は、限定されたものだ。私は許容範囲内だと考える。

それよりも、冒頭部分の呉禱訳は、原文に忠実な口語(白話)訳になっているところにご注目いただきたい。ほとんど

逐語訳であるといっている。これを見ただけで、特定箇所にしぼって負の評価を下し、あたかも呉禱訳の全体がそうであるかのようにいう陳建華の説明は、平衡を欠いたものだと私には思われる。

連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代巻』(天津・百花文藝出版社2009.11)がある。その第11章は、ロシア文学の翻訳についての解説だ。第4節で呉禱の翻訳に言及する。

連燕堂が呉禱訳について下した評価は、比較的高い。まず、ゴーリキーら3人のロシア作家を最初に中国に紹介した貢献を認める。つぎに、彼の翻訳水準が高いことをいう。

連は上に引用した箇所を同じように示して、つぎのようにいう。「……彼が使用したのは大衆的な口語文であり、それは当時においてけっして多く見られるというものではなかった。いくらか中国伝統小説(たとえば『水滸伝』)の痕跡をとどめているとはいえ、だ」(284頁)

カインの容貌をこまごまと説明描写するのが中国伝統小説に似ているという。しかし、二葉亭の原文を忠実に漢訳した結果なのだから、このばあいは中国の伝統などとは関係がない。連燕堂は、日本語訳を手元において比較対照したわけではなさそうだ。検討することなく呉禱訳だけを読んでそのように感じたのだろう。そのことこそが、呉禱訳がこなれた口語訳になっていることを証明している。

順を追って呉禱の漢訳を検討しよう。

呉禱訳「憂患余生」

マクシム・ゴーリキー(1868-1936)の「カインとアルチョム」(1899)は、二葉亭四迷によって日本語に翻訳された。「猶太人の浮世」と題する。それにもとづいて呉禱が漢訳したから重訳ということになる。呉禱がチェーホフ作品で行なったのと同様である。

版本に関しては、以下の通り。

憂患余生(原名猶太人之浮生 種族小説)

ゴーリキー作、長谷川二葉亭訳
「猶太人の浮世」『太陽』第11巻
第2、4号1905.2.1、3.1

1(俄)戈厲機著(日)長谷川二葉亭訳 呉禱重演 『東方雑誌』
第4年第1-4期 光緒三十三年正月二十五日-四月二十五日(1907.3.9-6.5)

[阿英160]は高爾基著とする[大典136][史索二122][編年176][編年182][劉晚36][慧敏454]

2(俄)戈厲機(高爾基)著(日)長谷川二葉亭訳 呉禱重演 阿英編 『晚清文学叢鈔』俄羅斯文学訳文巻 北京・中華書局1961.10

3(俄)戈厲機著 呉禱訳 『中国近代文学大系』11集26巻翻訳文学集一 上海書店1990.10

據上海《東方雑誌》第4年第1-4期,1907年版。

漢訳本文は1の雑誌初出(影印版)にもとづき、必要に応じて3の大系版を参照する。

ユダヤ人のカインは、小間物の行商をして生計を立てている。彼が売り歩くシハンという町は、泥濘と酔っぱらいが名物だ。

【二葉亭】夏はいつもむっとする程の物の饅た臭気に、腐敗したウオトカの匂がする。222頁

【呉構】到得夏天。更有饅餛魚肉の臭気。腐爛瓜果的悪風。3頁

夏になると、さらには魚肉のすえた臭気に、果物が腐敗した気分の悪い空気がただよう。

二葉亭訳が奇妙だ。蒸留酒のウオトカが腐敗するだろうか。そういう疑問を持たば、呉構が日本語訳の「物」を魚肉に特定し、酒を果物に置き換えた気持ちもわからないではない。しかも、「饅餛」に「腐爛」、「魚肉」には「瓜果」を、「臭気」と「悪風」を対に組み合わせて訳語を工夫した。

呉構の漢訳は、ここまでのところほぼ原文に忠実である。だからこそ、原文とは異なる部分がかえって目につくことにもなる。

同じく町の状況を説明して二葉亭訳には、こうある。

【二葉亭】皆酔払つて狂ひ廻る、それを又盜賊が窺齎て泥のやうになつた所を引剥ぐ。222頁

【呉構】来往猶如顛狂。3頁

歩き回ってまるで気がふれたよう。

住民にとっては油断も隙もない町の状況を説明する箇所だ。呉構訳は、後半部分を省略する。意図的なようでもあり、しかし、削除した理由はわからない。

カインが若者に脅かされ金を巻き上げられる場面を見る。カインにしてみればよくあること。ユダヤ人だという理由だけでいじめの対象になる。有り金全部を持っていかれると明日から商売ができない、とカインは泣きを入れる。若者がどなりつける。

【二葉亭】「世迷言吐すない！ 匆々と三十文出しツ了へ。それで我慢してやらア。」ノトその親方さん達は、牛乳が欲しけりや乳房を勞はれといふことを、チヤンと心得てござる。224頁

【呉構】我不説虚言！只能拿出三十文錢。孝敬你們罷。爺爺們若要牛乳。我立刻去取来。5頁

ウソじゃねえんで。30文ばかりなら差し上げますんで。親方さんが牛乳が欲しけりやすぐに取りにいきますんで。

カインのことを乳牛に見立てるのは、随意に搾り取ることができる人物だということだ。しぼりきれば、以後たかることができなくなる。手加減をする。カインは町の者からいつも嘲られ、いじめられる。町におけるカインの低い位置は、彼がユダヤ人であることに起因する。

それが呉構訳では、脅している方のセ

リフを脅されるカインが口に出したことにした。これは、どうみても誤解である。日本語原文のカッコ記号(「」)が発言者を示す手がかりになったはずだが、呉禱は無視をしたらしい。

これには続きがある。

【二葉亭】で、出すものを出して親仁は起上り、彼等と戯れて莞爾しながら連立つて行く。224頁

【呉禱】説罷。這才知那三個人原是和作頑取楽。当下轟然一笑。讓祂立起身来。一同前行。5頁

言い終わると、その3人が彼をからかっているとようやくわかった。即座にドッと笑うと、彼を起きあがらせて一同連れだって行く。

日本語訳は「出すものを出して」だから、カインは実際に30文を差し出している。ところが、呉禱訳ではからかったことにした。金を巻き上げられたにもかかわらず、深刻な様子を見せないカインの惨めさが半減してしまった。

好男子アルチョム(二葉亭訳ではアルテム)が登場する。大男で腕っ節が強い。しかも町の男達には嫌われるほどの美形だ。それで、女達は鼻屑にして、飯、酒、タバコに不自由はさせない。みつつのうちのどれかが欲しくなるまで動こうとはしないのがアルチョムだ。

呉禱訳は加筆も削除もなく原文にほぼ忠実だった。彼が訳したチャーホフ作品を検討して得られた私の結論だ。ところが、本作については比較的大きな削除が

ある。その1回目が出てくる。

『太陽』掲載初出で見れば85頁の下段全部の21行、86頁上段全部の21行、加えて下段3行、合計45行にのぼる。ざっと1頁分を呉禱はばっさり削除した。なにかと言えば、ある女房が、亭主の留守にアルチョムを誘う。子供が小遣いかせぎにその連絡をつけにくる。子供との会話が主たる部分を占める。色事をうかがわせる部分なのだ。働かなくても安泰の世を送っているアルチョムの男ぶりを示す箇所だが、呉禱には不必要に思えたりしい。性的なものを示す箇所をそのまま漢訳することをよしとしなかった。あるいは、それに子供が関わっているのを問題視したということか。

削除だけでなく細かな勘違いもある。

アルチョムが怪力であることを説明するのに町で出会った土方の手を締め上げることをいう。さらには肩先をつまんで痛い目にあわせる。そういう子供じみた行ないをシハンの人々は「アツちやんの悪戯」と呼んでいる(231頁)。

アルチョムに手痛い悪戯をされるのは土方なのだが、呉禱はどういうわけかカインのことにしてしまった。二葉亭訳では「カインも始終アルテムの酷い手に懸つて、手玉に取られる」とある。いっそのこと見知らぬ土方よりもカインにしたほうが説明を省くことができると考えたのだろう。それにしても、こうなると訳しすぎだ。

シハンの住民が称する「アツちやんの悪戯」とは、説明するまでもなくアルチョムだからアツちやんだ。呉禱はこの日

本語の習慣を知らなかったらしい。「亜鉛之悪戯(割注:亜鉛是夜叉之意)」(13頁)と翻訳した。「アツちゃん」を音訳して「亜鉛」を当て、その意味は夜叉、悪鬼だと説明する。怪物のいたずらでもそれほど隔たっているわけではないにしろ、適当であるともいえない。呉禱は、二葉亭のアルテムに「夏爾登」という漢字をあてている。それをふまえてしいて漢訳するならば「阿夏之悪戯」くらいか。罍

【注】

1) 原文については以下を参照した。『太陽』掲載の初出。『二葉亭四迷全集』第5巻 岩波書店 1953.11.25。『二葉亭四迷全集』第3巻 筑摩書房 1985.3.30。引用は筑摩版による。ゆえに総ルビではないとくり返す。

『清末小説から』第100号

2011.1.1

小説目録はたのしい	樽本照雄
《游艇伏尸録》の原作	渡辺浩司
<i>Robinson Crusoe</i> 粵語譯本《辜蘇歷程》		
考略	姚 達兌
“儒林医隠”非陸士諤考	謝 仁敏
晚清小説作者掃描(貳拾伍)...		武 禧
書家としての呉禱・補遺	沢本香子

《沙場歸夢》の原作

渡 辺 浩 司

1

《小説月報》第七卷第一号(商務印書館,1916年1月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用,影印本は奥付が無く,発行年月日は『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編,齊魯書社,2002年4月)による)に、Vasili Nemirovich-Danchenkoの短篇作品が二作掲載された。《沙場歸夢》と《愛國眞詮》で、共に書名下に“俄國 Nemirovich-Danchenko 著 / 英國 Alde^マrAnderson 譯”^{*1}、“鐵樵重譯”とある。

二作ともロシア・トルコ戦争を扱った短篇で、《愛國眞詮》については、すでに Denise Gimpel によって、基づいた英訳が指摘されている。それは『Bogdan Shipkin』で、『The Strand Magazine』Vol.50-No.297(1915年9月)に掲載されている(『Lost Voices of Modernity』284頁 基づいたことを述べているが、ロシア語原作は明らかにされていないし、中国語訳の内容についての吟味はなされていない。また、「The Strand Magazine in 1915」という



“SLEEP, DARLING, SLEEP, LITTLE ANGEL,” HE MURMURS.
(See page 56.)

指摘だけなので、正確なVolume、Number及び刊行月を補った)。

前者《沙場歸夢》についても、中国語訳が拠った英訳名と掲載誌が判明したので、本稿で報告する。

《沙場歸夢》の基づいた英訳名は『The Rules of War』、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol.49-No.292(1915年4月)であった。残念ながら、ロシア語原作は未詳である。

原作者 Vasili Ivanovich Nemirovich-Danchenkoは、1849(ユリウス暦では1848)年生、1936年没のロシアの作家で*2、ロシア・トルコ戦争、日露戦争、第一次世界大戦に従軍記者として参加していた。劇作家・演出家の Vladimir Ivanovich

Nemirovich-Danchenkoの兄。

英訳者 Alder Anderson については未詳。Strand誌では、他に Count Tolstoy の作品も訳している(『How Much Land Does a Man Require?』-Vol.50-No.298,1915年10月)。中国語訳者“鐵樵”は、惲樹珏のことで、原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没、作家でもあり、《小説月報》の編集責任者でもあった。

2

『The Rules of War』のあらすじを述べる。

ロシア・トルコ戦争時、バルカン半島の前線では、深い霧の中、夜が近づき、銃声も散発的になっていた。その日は大晦日で、ロシア軍の大佐と少佐が会話していた。負傷を理由に帰国してはどうかと言う大佐に対し、長く共に戦ってきたのだから帰国も一緒にしましょうと少佐が答えた時、最前線へと向かう騎兵の団が通りかかった。大佐は呼び止め、彼らが連れていたトルコ兵について尋ねた。彼らの話では、木の下にうずくまっていたのを捕まえ、連行したのだった。よく見ると、トルコ軍の大佐、Mahmud Beyで、大佐たちが捕虜にした男だった。少佐はトルコ語を話せたので、本人確認しようとした所、Mahmudは自分を速やかに処刑するよう等と答えた。少佐が、トルコ軍は敗北し、戦争はまもなく終わり、家に帰れるのにどうして脱走したのか等と尋ねた。Mahmudは、最近、全国民に小アジアへの移動命令が出て、そうなるともう家族を見つけれない、だから自

分の義務を果たそうとした等と答えた。その後、家族の話になり、Mahmudは、多くの血を流し、自分の子供たちを不幸にした奴らを神は罰して下さるだろう等と言い、少佐も、こんな戦争が誰のためになるのか、自分が戦死すれば家族はどうなるのか等と言った。捕虜への尋問が日常の会話に変わり、大佐もMahmudに同情を示していた。Mahmudは更に、自分の家族がたどる悲惨な末路を想像して話し、それが我慢できずに逃亡した、今でも子供たちの姿を思い出す等と話した。大佐が自分たちと全く同じだと言うと、少佐はMahmudの扱いについて尋ねた。銃殺を心配しつつも、結局、明日、將軍の所まで連行することになった。

三人は同じ部屋で眠った。少佐は眠れず、自分の子供のことばかり考えていた。突然、彼は部屋の中にいた。ベッドが二つあり、一つには娘が熟睡していた。彼は娘にお休み等と言い、十字を切った。もう一つには二歳にもならない息子が猫と一緒に眠っていた。彼は同じく十字を切り、隣の部屋に行った。六歳の息子が母と共に眠っており、ベッドのそばのテーブルには自分の写真と新聞があり、自分の派遣の記事の頁が開いていた。すべてが平和と愛と静けさに包まれていた。

Mahmudは少佐の幸せそうな寝顔をのぞき見ていた。彼は恐ろしい想像のために眠れず、寝返りを繰り返して涙まで流していた。その時、彼に不思議な力が与えられた。その力に気付くと、彼の顔には笑みが浮かんだ。

一方、少佐の顔には驚きと恐怖が現れ

た。夢の中で彼の子供たちはベッドに座っていた。彼らは近づいてくる黒い不吉な雲をおびえながら見つめていた。母に助けを求めたが、雲は両者の間に割って入り、少佐と子供たちだけになった。そこに大男の遺体とそれを囲む四人の子供が見えた。少佐の子供たちが、誰がその人を殺したのかを尋ねると、四人は皆、少佐を指さした。少佐の子供たちは彼から逃げ、彼の手は血に染まっていた。彼は何もしゃべれず、息苦しくなり、目が覚めた。

新年の朝で、Mahmudと大佐はずでにテーブルについていた。大佐も夢を見ており、その中で、トルコ兵捕虜を解放するよう訴える貧しい子供にずっとまとわりつかれていた。少佐も自分の夢を話し、二人はこの後どうするか話し合った。そのまま、Mahmudを連行するのだが、少佐は志願して付き添いになった。

少佐とMahmudは馬に乗り、ロシア軍の最前線に着いた。少佐はそのロシア兵に道を尋ね、トルコ軍の位置を聞き出すと言い、Mahmudを連れて進んだ。心配してついて来た兵を下がらせ、更に進むと、Mahmudに「もうトルコ軍まで遠くないから行け」等と言った。Mahmudが面食らっていると、彼は、もう自由だから故郷に帰ようゆっくりと言った。Mahmudは「宗教は違っても、神は一人しかいない。自分と家族は貴方と貴方の家族に神の御加護があるよう生ある限り祈り続けることを誓う」等と言って、去っていった。

少佐が最前線まで戻り、捕虜が逃げた

と言うと、先ほどの兵は彼をよく調べた後、「まだ捕虜は大勢いますから」等と言った。少佐は大佐の所へ戻り、捕虜を逃がしたので自分を逮捕するよう申し出た。しかし、大佐は少佐の手を固く握り大きく振るだけだった。

戦争中の一美談に見える。しかし、ロシアとトルコは数百年にわたり戦争を繰り返しており、殺戮に飽きたロシア軍大佐と少佐(家柄や有力者の後ろ盾も考えられるが、一般には戦果を挙げた=敵兵をたくさん殺したおかげで大佐や少佐に昇進できる)が、たまたま年長の捕虜に会い、たまたまその夜の夢見が悪く、たまたま新年を祝いたい気分が加わり、一人逃がしただけだとも思える。

3

中国語訳について述べる。英訳には前書があり、原作者を紹介し、ロシア・トルコ戦争への記者としての従軍経験が作品に活かされていること等を述べる。しかし、中国語訳はその前書は訳さず、また、文中に“大戦”が二回見えるので、欧州大戦(第一次世界大戦)と誤解する読者もいたのではないかと思う。

内容は、物語どおりに訳しているが、比喩や説明の短い加筆がしばしば見える。一例挙げる。Mahmudが脱走した理由を語る一部である。

... My wife will be overcome with terror and will immediately abandon the house, the garden, everything. All

will become the prey of some Greek or Armenian. She will go to Stambul with the children, but there she will get no assistance from the Government. Where is the Government to take the money from to help so many ruined families? There are hundreds of thousands of them. All the Government will do will be to send her over to Asia Minor, to Scutari, where she will be completely forgotten. What do you think a woman alone can do? There is but one possible issue. My daughters are pretty and healthy children, and she will sell them to those who will bring up the poor little things in ignorance even of their father's name. Later, when they are older, they will be sold over again to some rich old man in Aleppo or Damascus. My sons will grow up to be slaves. As for my wife herself, when her first grief is assuaged, she, too, will enter some harem. If I were to return a year hence, what should I find? Nothing! Neither house, nor wife, nor child! I should not be able to discover even what had become of them. There would be nobody to give me any information. I should have lost all; my house would have another master. And you asked me why I ran away! It was because I simply had not the courage to support the mental torture any longer.” (367頁左 - 右)

(…妻は恐怖に耐えられず、すぐに家や庭すべてをあきらめるだろう。すべてはギリシア人かアルメニア人の戦利品になるのだ。妻は子供たちとStambulに行く、しかしそこで政府からは何の援助も得られないだろう。大勢の没落家族を救うために、政府はどこからお金を調達するのか? 数十万人いるのだ。政府がすることは、妻を小アジアかScutariに送り込むだけで、彼の地で妻は完全に忘れ去られるだろう。女一人で何ができると思う? 考え得る結末は一つしかない。娘たちはかわいくて、健康な子供だ、妻は娘を人に売るだろう、父親の名前すら知らないかわいそうな子供たちを育てている人に。後に、娘たちが大きくなれば、AleppoかDamascusの裕福な年寄りに再び売り渡されるだろう。息子たちは成長して奴隷になるのだ。妻自身は、そんな最初の深い悲しみが和らいだ頃、haremに入るのだろう。もし私が一年後に戻れば、何を見つられるのか? 何も無い。家も妻も子供も無いのだ。皆がどうなったのかさえ知ることにはできないだろう。私に教えてくれる人は誰もいないからな。私はすべてを失ってしまうのだ、家には別の主人がいるだろう。なのに、あんたは私になぜ脱走したのかと尋ねなさる! もはや心への拷問に耐える勇気が無くなったからだ。)

…吾愛妻將苦惱恐怖。至於無可如何。

而棄置其住屋。棄置其花園。棄置其種種所有。屋也。園也。什物也。將爲他人戰利品。吾妻則攜其幼女。負其嬰兒。流離瑣尾。而趨斯撻潑爾。此時舉目無親人。更無誰何能一相濡煦。亦并不能得政府之相助。際此亂離紛擾之時。而謂能於顛沛無家之難民而加以救助。幾時曾見有此政府者。以難民之人數。不啻億萬千百。政府僅僅驅之至小亞細亞。至史苛太里。而軍書旁午。萬緒千頭。人民轉徙至於何所。彼且完全忘之。試思以一婦人。窮獨無告。至於此極。果何事可爲矣。山窮水盡。逼拶而出。則有一途。吾女固美而壯健之女孩。於是將被賣。使隨不知誰何之人以去。而此可憐之女孩。直無由知其生父之姓名。久之。至彼等長成。又將二次被賣。展轉至於富人之手。其在阿來坡乎。丹麥乎。吾安從知之。而吾兒子。則將長成爲自然之奴隸。至吾愛妻。第一幕悲劇既畢。亦將墮落爲娼妓。或女僕。而吾則留此。至大戰既畢。和議告成。然後歸。寢假爲一年以後事。更於何處尋得骨肉。俾團聚乎。城郭既非人民已改。高臺既已平。曲池又已夷。妻孥存沒。將信將疑。豈但尋覓不可得。彼等化爲猿鶴歟。化爲蟲沙歟。吾并不得而知之。吾此時何所有。惟知吾家田產易主人耳。而公等問我何故圖遁。吾何故圖遁。簡單言之。吾實無勇。不勝此慘刑之煅煉耳。”(6頁上-7頁上,句点是原文のまま,引用符は補った,以下同)

(…愛妻は恐怖に苦しみ、どうする

こともできなくなり、家を捨て、庭を捨て、すべてを捨てるだろう。家、庭、その他は他人の戦利品になるのだ。妻は子供の手を引き、赤子を背負い、移動が日に日に苦しくなる中、斯捷潑爾に向かうだろう。その時、周りを見ても親戚はおらず、共に支え合える人など全くない、その上、政府の援助も得られない。こんなに混乱している時に、没落した家無し避難民を助けられると思うか。そんな政府がいつ存在した。避難民は億にも上る数で、政府はただ彼らを小アジアか史苛太里に追い立てるだけだ。軍の命令は複雑に入り乱れており、人々は結局どこに移されるのだろう。そして、妻は完全に忘れ去られるのだ。女一人で窮状を訴えるすべも無く、最低の所にまで来てしまい、一体何ができると思うんだ。窮地に迫られて進むのは一つの道しかない。娘たちは美しく健康な子供だ、だから売られて、誰か知らない人について去ってしまうだろう。かわいそうな娘たちはいつまでも父親の名前すら知る由もない。後に娘たちが大きくなれば、また売られ売られて裕福な人の手に渡るのだ。それが阿來坡なのか、丹麥(デンマーク)なのか、私にどうしてわかるのか。また、息子たちは成長してそのまま奴隷になるだろう。愛妻はこの悲劇の第一幕が終われば、やはり娼妓か下女に身を落としていくのだ。私がここに留まって、大戦が終わり、和

平が宣言される、それから帰るのは一年後になるだろう。それで、どこで家族を捜し出し、一家を集められると言うのか。町は昔のままではなく、人々は変わり、丘は平坦に池も埋められ(地形も変化し)ている。妻子の生死は半信半疑で、ただ捜し求めても見つけられないだけでなく、彼らは猿か鶴に化したのか、虫か砂に化したのか(戦乱で死んだのか)、私には知ることできないのだ。その時、私には何があるのだ。私の土地の主人が変わっているのがわかるだけだ。そこに、君たちはなぜ脱走したのかと私に尋ねなされる。なぜ脱走したか、簡単に言ってしまうと、私には本当に勇気が無く、この拷問のような試練に耐えられないからだ。」)

細々と加筆しているが、しなくてもいいように見える。

もう一例挙げる。奇怪な夢を見た原因について、大佐が述べる場面である。

... Did you notice anything peculiar about the wine last night?" (369頁右)
 (...君は昨晚のワインが何か変わっていたことに気付いたか?)

...此土囚爲回教。得無有幻術乎。抑置藥於所飲酒乎。...(10頁上)

(...このトルコ人捕虜はイスラム教徒だから幻術を持っているのではないか。それとも酒に薬を入れたのか。)

…)

余計な加筆である。中国では、イスラム教徒は宝を見つける以外にも特殊な能力を有していると考えられていたようだ。

省略は少ない。大きな省略箇所は、夜に少佐の夢が悪夢に転じる直前のMahmudの描写場面である(368頁右)。また、あらすじで述べた「宗教は違っても、神は一人」(Religions may be different, but God is one. 372頁右)の台詞は面白いと思うのだが、省略されている。

誤訳も少ない。一例示しておく。前半で、大佐たちが通りかかった兵にどこへ行くかを尋ね、“To the outposts, sir.”(前哨地点までです)と答える場面がある(364頁左)。中国語訳では、“余自前哨來也”(我々は前哨から来ました)と反対になっている(3頁上)。また、「the Colonel」(大佐)を“大佐”と訳すが、「the Major」(少佐)を“少將”と訳す。当時の中国の軍隊の階級制度が不明なので、正誤はわからないが、現在では少将の方が大佐よりも上級なので、戸惑いを感じる。

ロシア語原作が不明なので、言及する価値が下がるが、書名について、英訳は『The Rules of War』(戦争の規則)とする。中国語訳は《沙場歸夢》(戦場で見る故郷の夢)とわかりやすく改めている。この「the rules of war」が、英訳の文中に一度だけ出てくる。最後にその箇所を挙げておく。大佐たちがMahmudへの尋問を始めた場面である。

“I have never spoken that which is not the truth” the prisoner had risen to his feet with an effort.“Yesterday I escaped from Kazanlik; to-day I have been taken again by your men. It is not easy to go very far on foot” he gave a wry smile “especially when you are wounded both in the head and the leg. Now there is this new wound in my shoulder, which ”

“Sit down,”said the Major, trying his hardest, but in vain, to adopt an official tone.“You are aware that, by the rules of war ”

“You need not remind me of that. You have won. Order me to be shot. I perfectly realized the risk I took when I ran away yesterday. I have played and lost. Death is the penalty.”(366頁左)

(「私は真実でないことは決して話さない」 捕虜は努力して立ち上がっていた。「昨日、私はKazanlikから脱走した；今日、私はまた君たちの兵士に捕まった。歩きで遠距離に行くのは容易ではない。」 彼は苦笑した 「特に頭と足にケガをしている時には。今度は肩にこの新しい傷がある、これは 」

「座れ」少佐は言った、懸命に役人風に話そうとしたが無駄だった。「君は知っているだろうが、戦争の規則によって 」

「それを私に思い出させる必要は無い。君たちは勝ったんだ。銃殺の

命令を出すが良い。昨日、逃げ出した時、その危険もすべて承知していた。私は賭けに出て負けたのだ。死ぬのはその罰だ。」)

土人 勉強起立答曰：“是也。昨日幸脱險於卡森立克。今日復被執於從者。吾足脛疲軟。已不復能遠遁。自頂至踵。悉在足下掌握。生殺惟命。”

少將曰：“試坐而言乎。”土囚仍立不動。少將強之坐。曰：“若不坐。將謂軍中規則應爾耶。”

土人曰：“足下奚煦煦爲仁。優待而坐我。今雄而鳴者爲吾子。失敗者安所逃死。吾惟不卹彈丸洞胸。故敢於圖遁。”(4頁下,セミコロンは補った)

(トルコ人は無理に立ち上がり答えて「その通り。昨日、運よくカ森立克を脱走したが、今日、また(君たちの)部下に捕まった。足に力が入らないので、遠くへ逃げるのは不可能だった。頭からかかとまですべては君たちに握られている。生かすも殺すも(君たちの)命令次第だ。」

少将は「座って話さないか。」トルコ人捕虜は立ったまま動かなかつた。少将は強制的に座らせようとし「もし座らなければ、軍中の規則を君に適用するぞ。」

トルコ人は「君はなぜお慈悲で私をもてなして座らせようとするのか。今、強さを誇っているのは君たちだ。敗者がどうして死から逃れられよう。私は弾で胸に穴を開けられることなど気にしていない。だから逃走を図

ったのだ。」)

英訳は「the rules of war」からMahmudに何を言いたかったのか書かれていないが、中国語訳で、単に、座らなければ云々とするのは解釈の幅が狭いと思う。

4

以前、拙稿「《與子同仇》の原作」(本誌第98号,2010年7月1日,掲載)で取り上げた、本作と同じ惲樹珏訳の《與子同仇》(《小説月報》7-2,1916年2月25日)は、第一次世界大戦中、国のために自らを犠牲にする覚悟で軍事作戦を遂行した民間女性の活躍を描く内容で、人々の士気を鼓舞するような物語であった。

そして、本作《沙場歸夢》(《小説月報》7-1,1916年1月25日)は、人々に家族愛を思い出させ、厭戦気分になるような物語であった。

厭戦・反戦へと気持ちが向かうような作品を載せたかと思えば、一か月後には戦争参加への意識を高めるような作品を載せている。どちらも基づいたのは『The Strand Magazine』で、Strand誌の編集方針はどうなんだという点はさておき、訳者の惲樹珏は、編集責任者として偏らない立場を示したかったのか、或は戦争ものならば何でもよかったのか、疑問が生じる所である。私としては、戦争の様々な側面を短篇作品によって人々に知らしめ、考えさせたかったもので、前者の偏らない立場を示したかったのだろうと考える。 罫

【注】

- 1) 《愛國眞詮》書名下は、「Danchenko」を「Danchenks」に誤る。
- 2) 他書では、VasiliをVasiliiやVasilyとする表記、NemirovichをNemirovitchとする表記も見られた。生年については、1845(ユリウス暦では1844)年とするものもある(『集英社 世界文学大事典3』320頁)。余談であるが、1908年4月に来日したこともあり、二葉亭四迷と会見している。

【参考文献】

- 陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社,1993年5月
- 梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》中華書局,1997年2月
- Denise Gimpel 『Lost Voices of Modernity: A Chinese Popular Fiction Magazine in Context』University of Hawai'i Press,2001年
- A.M. Прохоров主編 『Большая Советская Энциклопедия』 17, 《Советская Энциклопедия》,1974年
- Jeanne Vronskaya with Vladimir Chuguev 『A Biographical Dictionary of the Soviet Union 1917-1988』K.G.Saur,1989年
- 『世界文学大事典』編集委員会編 『集英社 世界文学大事典3』集英社,1997年4月25日
- 二葉亭「ダンチエンコ翁と語る」- 『東京朝日新聞』1908年4月29日,未見
- 『二葉亭四迷全集 第四卷』(筑摩書房,1985年7月10日)を使用

从“文界上乘”人物“王晋庵”说起

刘 德 隆

郭长海先生以掌握近代文学人物资料为学人所叹服。近日其大作《刘铁云的佚诗和几件联语》(刊日本《清末小说》第33期2010年12月1日)又披露了《老残游记》作者刘鹗1905年在天津的一些活动情况。材料10则,有记有述,再现刘鹗生活状况,弥足珍贵。本文试就其中一则展开议论,以期引起对刘鹗、王国维、刘大绅之关系的探讨。为叙述方便,录全文于下:

中国第一白话小说《老残游记》出现

《老残游记》一书,洪都百炼生所撰也。分初、二、三、四等集,每集20卷,曾一现于《绣像小说》,海内欢迎。後因绣像馆主人将其第十卷尾改换半页,百炼生遂不发稿。故至十三卷而止。好书不传,人皆惜之。严几道先生云:“中国近一百年内无此小说。”梁任公出重价购其全稿,拟编入《新小说》印行。王君晋庵深通英文,曾译心理、伦理、物理等学教科书者,能读英国最深文理之书。读《老残游记》叹曰:

“不意中国亦有此人！可与英国最高小说平行。”此三子者，皆中国文界最上乘也。其推崇如此，则此书价值可想矣。

七月间，百炼生过津，本社主人再三婉商，始蒙将初集20卷全稿交来。二集稿，面允四个月内交齐。今定于九月初一日起，先印百炼生《自叙》一篇，以后每日付印初集一版，以饯海内君子之望。

天津《日日新闻》1905年9月22日（光绪三十一年乙巳八月二十四日）

一

现存《老残游记》初集二十回、二集九回、外编残稿若干。刘大绅曾说：二集计有14回。此说尚无实证。然上引之消息披露《老残游记》“分初、二、三、四等集，每集20卷”，也就是说《老残游记》曾有计划写作80卷。那么《老残游记》究竟已经写了多少卷，实在是值得再探讨的问题。故若再有《老残游记》显于天壤之间，切不可立断其为“伪作”，仍须认真鉴定，方可以结论。

二

对《老残游记》的评价已经不少，上引之消息增添了严复、王晋庵二人的直接评价和梁启超对《老残游记》所持的态度，这又一次使研究者眼界大开。而这些评价都是在《老残游记》仅完成初集十三卷且人们只读到了前十一卷的情况下就做出了如此评价，实在令人敬叹。更有甚者，其发表时日先于目前所有对《老残游记》的评价。因此其意义更远于目前所有评价之

上。

三

此则消息提出“皆中国文界最上乘也”的三个人物。严复、梁启超被人们所熟悉，不必赘述。王晋庵为何许人也？

此则消息说：“王君晋庵深通英文，曾译心理、伦理、物理等学教科书者，能读英国最深文理之书。”

郭长海先生说：第三人是王晋庵，此人稍生疏一些，但据广告所介绍的文字最多、最详，可见此人来历也不小。聪明而博见如郭长海先生者只用了“稍生疏一些”，却不肯直接写出他的姓名。此含而不露的做法实在是一个研究者在尚未找到直接证据前最妙的语言。然笔者可以断言：王晋庵就是王国维。闪入近代文史专家张人凤先生脑际的“王晋庵”的第一反应，也是王国维。

四

2010年10月25日在电话中，郭长海先生问：说王晋庵就是王国维你有什么根据？笔者回答如下：

1、查遍笔者手边所有工具书，在1905年，能够与严复、梁启超并肩而被人称为“文界最上乘”的人物中，并无“王晋庵”其人。但是天津《日日新闻》又断不会为混淆视听而凭空捏造出一个“王晋庵”。故“王晋庵”必有其人。

2、与“王晋庵”三字字音相近者，仅有一个人名：王静安。“晋”与“静”音相近，区别在于前后鼻音不同。“庵”与“安”则字音完全相同。近代著作中用相近音的字代替一个人名的情况比比皆

是：狄楚青、狄楚卿；刘味青、刘渭清、刘渭卿等。那么用“王晋庵”代替“王静安”也不是没有可能。

3、根据王国维研究专家陈鸿祥的原文：“王国维，初名国楨，取字静庵（安），又字伯隅”（《王国维年谱》齐鲁书社1991年12月初版），明确的说明王国维字“静庵”。“静安”只是另一种写法。且王国维著译最早的单行本名就是《静庵文集》。

4、此则消息说“王君晋庵深通英文，曾译心理、伦理、物理等学教科书者”。王国维1903年翻译有英国西额惟克的《西洋伦理学史要》，刊于《教育丛书》。

1902年《教育世界社》出版的《哲学丛书》四种，王国维翻译其中三种《哲学概论》《心理学》《伦理学》。1905年出版的《静庵文集》更是汇集了他的哲学、文学、教育论文。前述为王国维1905年前撰述、翻译的简单情况。与上录消息所书完全吻合。

因此王晋庵就是王静庵，就是王静安，就是王国维。但不得不说，1905年，49岁的刘鹗因多种原因，已入“名人”之列，而29岁的王国维尚属“后起初秀”，与名声大振尚有一段距离。

五

王国维谈《老残游记》“不意中国亦有此人！可与英国最高小说平行”。寥寥数语，前者赞人，后者赞书。那么“此人”——洪都百炼生——刘鹗与王国维有何关系么？回答是：有关系，但不明朗。因为目前并无直接的材料证实之。但是可以从以下关系推测：

1、就社会活动而言：刘鹗是东文学

社的主要创办人（或说资助人）之一，王国维是东文学社的“学员”。

2、就人际关系而言：刘鹗与罗振玉是儿女亲家，王国维与罗振玉亦是儿女亲家。

3、就学术研究而言：刘鹗是甲骨学的开山之人，王国维是“甲骨四堂”之一。

更可以证明的是，刘鹗1886年娶侧室茅氏夫人（1870.1.22—1917.4.26），1909年病逝于新疆乌鲁木齐。1916年2月王国维从日本回到上海，多次去探望刘鹗遗孀茅氏夫人——季英太夫人。试举例：

1、1916年7月1日王国维致罗振玉函：季英太夫人昨、今病势又亟，恐不测即在日内。今日内人往始知之。病人神思尚清，昨日遗命一切，今日已不能语，恐不得愈也。如何如何！

2、1916年7月4日王国维致罗振玉函：季英太夫人病势甚剧，维于初二日晚始知。亟往问讯，则闻是日发晕二次，已预备寿衣等。次早渐有转机，昨日又较平复。

3、1916年7月8日王国维致罗振玉函：季英太夫人之病前晚往候，已稍轻减，看来势虽凶险，尚可无妨。

4、1916年7月11日王国维致罗振玉函：季英太夫人已稍愈，可以无妨。

如此记载数十处，可见王国维、罗振玉与刘鹗之关系。

六

王国维与刘鹗的关系尚难叙述清楚，但是王国维与刘鹗之子刘大绅（亦即上文之季英）、刘鹗之侄刘大猷（秩庭）、刘大钧（季陶）关系密切。1916年2月9（正月

初七日)王国维从日本回到上海便与刘大绅等频频见面。其约两个月50余天的日记中记与刘氏兄弟见面20次左右,或晤谈、或散步、以至于同饮、摄影,关系自非同一般。试举数例:

2010年11月12日改毕

上文初稿,曾请郭长海、刘德符等先生过目。从美国回来的任光宇先生11月12日来信,就本文上述所引天津《日日新闻》消息《中国第一白话小说 老残游记》的作者和所述内容的真实性提出问题,录于下:

正月初八日(2月10日):归寓已四时余,则抗公已返,季英亦在。晚膳后九时,季英辞去。(笔者说:前后五个小时,自然有内容可说,惜无记载。)

《日日新闻》的那篇新闻出自何人手?看口气可能是方药雨?这样的话,对好朋友、大股东(甚至是后台老板?)难免溢美之词,此文的可靠程度可能要打点折扣了,希望能找到其它更多资料来支撑。

正月十一日(2月13日):访刘秩庭于久兴里,并晤其弟季陶,坐一时许.....游徐园.....季陶携照相具为四人摄影。(笔者说:登门拜访并同游摄影,关系亲密。)

2010年11月13日晚

(本文信函、日记均引自《王国维在一九一六年》,陕西古籍出版社2008年12月初版)

正月十四日(2月16日):与敬公、季英谈。上灯后,敬公、季英招饮于“满庭芳”.....(笔者说:不是“请”,而是“招饮”,随意而亲切。)

二月初二日(3月5日):抗公与秩庭来谈,同出散步。(笔者说:又是摄影、又是散步,其关系岂是一般?)

二月初三日(3月6日):午时,季陶来.....午后四时出、至蟬隐晤敬公、凤洲,季英等,五时余归。(笔者说:一日之内,连晤兄弟二人;连续两天,你来我往。关系可谓亲密)

『清末小説』第33号

試論晚清言情小説的特点	袁 進
『燈臺卒』をめぐる	吳 燕
吳禱の漢訳チャーホフ	樽本照雄
林訳小説《紅篋記》などの原作(下)	
.....	渡辺浩司
吟邊燕語留餘韻	李 慶國
林纾与五四新文化派之爭史事编年	
.....	张 俊才
刘铁云的佚诗和几件联語	郭 长海
《消闲报》与连载小説之初起	何 宏玲
《<盛京时报>近代小説簡目》补遺	
.....	张 永芳
商務印書館出版的立憲圖書	柳 和城
ほか	

另:王国维为近代学术大家,其《人间词话》影响巨大。人多未注意《人间词话·原稿卷首题诗》题名为《戏效季英口号诗》。季英即刘大绅。刘大绅有诗词存稿名《春暉軒心痕殘稿》,惜其早年诗词仅存三四首,未见“口号诗”。 罍

晚清小説作者扫描 (貳拾陸)

武 禧

(一三九)

亚东破佛

小説创作：《双灵魂》《泡影录》《栖霞女侠》《双义传》《三浦女子》《慧珠传》《东瀛新侠义》《闺中剑》《歼鲸记》《空桐国史》《琵琶湖弹词》《剖心记》《情天琐记》《三家村》《天上大审判》

彭俞(1876-1946)：原籍浙江绍兴。本名彭泰，启泰，字逊之，号荫庵、守愚生。曾用笔名：破佛、亚东破佛，守愚氏、盲道人、无心居士、儒冠和尚、光昊氏、怀禹、安仁、妄忍、常仁、闲邪斋主人。室名竹泉亭、闲邪斋。曾随祖父宦游江苏溧阳，落籍。1906年春，到上海从事文学活动。1907年11月创办《竞立社小说月报》，共出版两期。其《创刊号·社说》提出讲求竞立之道，主张“保存国粹”“革除陋习”“扩张民权”。刊有小说《歼鲸记》(亚东破佛撰，儒冠和尚评释)、《过渡时代》(铁汉初稿，勤补加评)、《剖心记》(吴趸人撰)、《尚父商战记》(杭州谢亭亭长撰，儒冠和尚评)、《飞艇》(笺骚)、《绍兴酒》(山阴醉客编)、《空桐国

史》(亚东破佛撰、盲道人译注)等。在自序中他说“尝自恨为家境所累，又不得一知己，遂为糊口计，糜耗精神于小说之中。”1918年到杭州由马一孚介绍到虎跑寺，就法轮长老习禅规，与李叔同相识。後彭出家，影响李亦出家。1928年其子迎养还俗。1946年无疾而终。在其手稿《海音潮》中记载，其最佩服李少山、黄锡朋、夏涤庵三人，喻之太师、太傅、太保。小説创作甚多。另有《续纂虎跑寺志》《湖隐禅院纪事》等，晚年著有《竹泉诗词草拾遗》。

(一四零)

沁梅子

小説创作：《滔天浪》《精禽填海记》等(小説创作甚多，见后)

陆士鄂(1878-1944)：上海清浦朱家角人。名守先，字云翔，号士鄂。别署云间龙、沁梅子、云间天贲生、儒林医隐(存疑待考)、寓沪医隐(存疑待考)。祖父陆铸，字仁生，号稼夫，捐附贡生，直隶候补，府经历勅受修。父亲陆世沚，字景平，号兰垞。邑廪生。1887年随朱家角名医唐纯斋学医。1892年到上海谋生，曾为典当学徒，后回青浦。1898年再到上海，悬壶行医。时孙玉声在福州路办上海图书馆，允许陆在图书馆开一诊所，同时进行小説创作。1900年娶浙江镇海茶叶商人之女李友琴为妻。1900年长女敏吟生，1902年次女清曼生，1910年长子清洁生，1913年次子清廉生。是年父亲去世，年41岁。1915年妻李友琴病故。1917年娶松江泗泾李素贞为续室。自1906年至1918年12年间，以写作为主，有大量小説出版。1918年

“挟术游松江”，在松江西门外阔街悬壶行医，前后著医学著作十余种。1919年幼子清源生。1923年协助孙玉声办《小金钢钻》报。1924年因军伐征战，回到上海。开始在《新闻夜报》副刊《国医周刊》介绍医药知识。1925年在英租界上海图书馆行医，所治疗科目为：伤寒，湿热、咳嗽、妇科、产后、调经各种杂病。其行医情况在《金钢钻报》等多有报道。1930年与余云岫就中西医之优劣进行辩论。1931年任华龙小学校董。1934年组织《中医友声社》在电台主讲“医学顾问大全”。被誉为上海十大名医之一。此后十年，陆续发表杂文和医学著作。1943年冬中风。1944年3月病逝。郑逸梅云“故朋侪中熟于清代掌故者，有许指严、陆士鄂二子。而豫曩年辑《钻报》，每晚诸俊纷集钻楼，谈笑为乐。陆士鄂其一也。”郑又云“革命烈士邹容瘐死于狱中，刘季平捐地为营葬，人无不知有刘义士。刘行三，因以‘江南刘三’自号。与故小说家陆士鄂为葭莩亲。其夫人陆灵素，即陆士鄂之妹也。”

陆士鄂的短篇小说《冯婉贞》曾被选为语文教材。因1910年创作的小说《新中国》中预测要在上海召开世博会而与百年后的2010年上海举办世博会情况相吻合，故被广为宣传。

陆士鄂著作简况：

1906年写作发表《精禽填海记》《卫生小说》(《医界镜》)《滔天浪》。

1907年出版《新补天石》《滑头世界》《滑头补义》《上海滑头》《东西伟人传》《文明花》《鸳鸯剑》。同年在《神州日报》连载《青史演义》。

1908年作《公治短》。发表《官场真

面目》《新三角》《日俄战史》《新孽海花》《残明余影》，翻译《英雄之肝胆》。

1909年作《新水浒》《新野叟曝言》《风流道台》《改良济公传》《军界风流记》《骗术翻新》《绿林变相》《女嫖客》《女界风流史》《绘图新上海》《苏州现形记》《新三国》《新三国志》《鬼国史》。

1910年作《乌龟变相》(《乌龟生涯》)《新中国》(《立宪四十年后之新中国》)《最近官场秘密史》《六路财神》《道魂窟》《玉楼春》《最近女界秘密史》《最近上海秘密史》(《社会秘密史》)。

1911年作《龙华会之怪现状》《女子骗术奇谈》《商界现形记》《官场现形记》《官场新笑柄》《十尾龟》《血泪黄花》《女界风流史》《上海新艳史》《官场艳史》。

1912年作《孽海花(续编)》《末代大老爷》。本年及此前作《历代鬼才史》《也是西游记》(合著)《雍正剑侠传》。

1913年作《宫闱秘辛》《朝野珍闻》。

1914年有连载小说《柳湖双艳记》，短篇小说《德宗大婚记》《新娘！恭献！哈哈》《贼知府》《赵南洲》《花圈》《徐凤萧》《英雄得路》。出版文学笔记《蕉窗雨话》。

1915年出版《顺治太后外纪》《孝钦后外传》《帐中记》，创作短篇小说《顺娘》《冯婉贞》《陈锦心》《顾珏》。教科书类《初学论说新范》。

1916年出版《帐中语》。

1917年出版《八大山人》《剑声花影》。

1918年作《中国黑幕大观·政界之黑幕》。作《薛生白医案》。

1919年作《叶天士幼科医案》。

1920年创作小说《孽海情波》。编写《叶天士手集秘方》《医学南针初集》。

1921年创作小说《血滴子》。出版《增评温病条辨》《王孟英医案》《九散膏丹自制法》。增补《叶天士医案》。

1922年创作《七剑三奇》《剑侠》《雍正游侠传》《七剑八侠》。编《增注古方新解》。

1923年出版《红侠》《黑侠》。

1924年出版《白侠》《女皇秘史》《战血余腥录》。出版《医学南针二集》

1925年出版《今古义侠奇观》，《续小剑侠》，在《金刚钻报》连载科幻小说《环游人身记》。撰《读书之法》。

1926年连载科幻小说《寒魔自述记》。出版《家庭医术》。

1928年出版《双蝶怨》《古今百侠英雄传》《新红楼梦》。

1929年出版《江湖剑侠》。点评《明宫十六朝演义》。撰短篇《记平湖支部游》。

1930年出版《龙套心语》(《江左十年目睹记》)。校订《万病验方大全》。

1931年作《说部杖谈》。

1932年作《猫之自述》。

1933年作杂文《说小说》。散文《雪夜》《快之问题》。小品文《马桶》《四库全书》《僵先生》《白话教本》《新文学》。有《老板娘》。医学小品文《温病之治法》《我之读书一得》《迴溪书质疑》《清郎中门槛》。

1934年发表医书《国医之历史》《释郎中》。

1935有《著作界之今昔观》。校订《医药顾问大全》。

1936年作《士鄂医话》。发表论文《江西热役之讨论》《中西医只辩证法》，杂文《南窗随笔》。

1937年出版《李士材乙宗必读》。发表《中医教育之我见》。

1938年撰《内经伤寒》。

1941年发表医学论文《病名宜浅显说》《陆氏谈医》。 罍

(说明：本文所用材料多源自田若虹《陆士鄂小说考论》)

夏瑞芳暗殺事件の犯人

1914年1月6日、商務印書館は金港堂との日中合弁を解消した。その直後、商務印書館社長の夏瑞芳が発砲により暗殺されるという事件がおこる。夏瑞芳は、四十三歳だった。

不思議なことのひとつは、犯人の名前がまちまちなのだ。

張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』(北京・商務印書館1991.12。116頁)では、犯人の名前は王慶餘である。

同じく『張元濟年譜』の141頁注1は、犯人を「李海社(即周棲雲)」とし、銃殺が執行されたと『申報』(1917.10.14付)の記事を紹介する。

これはどういうことか。ふたつの名前

がでてくる。犯人は王慶餘ではないのか。だが、『張元濟年譜』には説明がない。ちいさなことだが、気になっていた。簡単に説明しておこう。

私は、暗殺犯人の名前を王慶餘ではなく王慶瑞だと書いた(『初期商務印書館研究』298頁。増補版384頁)。1字が違う。これには理由があるのだ。

『申報』では1914年1月11日から夏瑞芳暗殺事件を連続して報道している。その記事に出てくる犯人の名前を追った。順に見ていく。

- 1月11日 犯人名なし
- 1月12日 王慶餘 現年三十二歳 山東人。供係某人允給巨資囑令將夏暗殺云云。

犯人は、大金を受け取って暗殺を請け負ったと自供している。ここまで、犯人は王慶餘という名前だ。ところが翌日から表記が変化する。

- 1月13日 王慶餘(即王慶瑞)。兇徒王慶餘即王慶瑞。凶手王慶瑞(写真参照)
- 1月14日 兇手王慶瑞

「餘」と「瑞」の違いがどこから生じたのかよくわからない。ただ、新聞報道からすれば、同一人物に違いない。13日以後は王慶瑞という名前で引き続き登場する。

- 1月15日 山東人王慶瑞。兇徒王



慶瑞

- 1月16日 兇徒王慶瑞
- 1月17日 山東人王慶瑞
- 1月19日 兇犯王慶瑞

以上の記事を根拠にして、私は犯人の名前を王慶瑞と書いた。彼は現行犯逮捕だった。

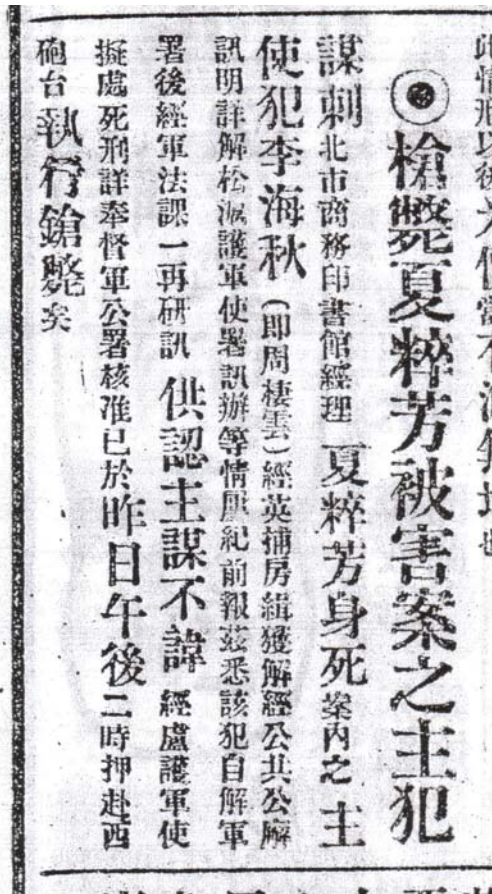
つぎのニュースは、王以外の容疑者が逮捕されたというもの。

- 1月29日 周棲雲とその父周静安。関係者として彭良ら

記事によれば、周棲雲は、1908年に浸会大学堂で学び英語ができたという。その父の住所に小学校を開設し教えていた。父といっても「定姻」とあるから養子らしい。夏瑞芳暗殺事件後、周父子は行方をくらました。

- 2月3日 兇徒王慶瑞。周^{ママ}[棲]雲と父周静安

裁判が開かれ、王慶瑞は死刑になるこ



と、周静安は保釈となったことが報じられる。周棲雲の指図だった、というのが王慶瑞の自供である。

『東京朝日新聞』2月21日朝刊*1
夏瑞芳暗殺者銃殺(同上[二十日上海特派員発])

商務印書館支配人夏瑞芳を暗殺せる應慶瑞は廿日午後二時鎮守使の公署に於て銃殺の刑に処せられたり

文中に見える「應」は、「おう」にあてた誤字である。実行犯の王慶瑞が先に処刑されたことがわかる。

10月14日 首謀者李海秋(即周棲雲)が白状したため死刑の判決がでていた。昨日午後2時、銃殺が執行された。(写真参照)

李海秋とは、養子になる前の本名だった。

周は夏瑞芳暗殺の首謀者である。実行犯が王慶瑞だ。犯人の名前が複数でてきたのには、上のような状況だったとはなんとなく理解できる。だが、すっきりと納得するのは無理だ。

大学で学んだことのある周棲雲が、なぜ夏瑞芳を殺害しなければならなかったのか。小学校で教えていて殺人のための大金を用意できたのか。

陳其美が事件の背後にいるとはいわれている*2。

疑問が残る。周棲雲と夏瑞芳の関係が不明瞭である。結局のところ暗殺の動機が不明なのだ。ゆえに事件全体がすっきりしない印象を残す。

もう少し新聞を調査すれば、暗殺の背景までも報道しているだろうか。残念ながら、今、そこまで手が回らない。 罍 (樽本照雄)

【注】

- 1) 藤元直樹氏より資料をいただいた。2010.5.24。感謝します。
- 2) 1914年1月12付『東京朝日新聞』には、次のようにある。「原因は第二次革命の際居留地官憲が閩北に兵を入れ陳其美等の本営を立退かした

るは同人(注:夏瑞芳)が工場保護の運動せる結果なりとの恨みを受けたるに依るものと察せらる」

清末小説から

野間信幸氏より資料の提供を受けました。感謝します。

張永芳、王金城、馮涛主編 『《盛京時報》近代小説叙録』瀋陽出版社 2010.8

陳 改玲 “五四”翻譯文学与小説創作的“互動”關係 『文学史的探索与沈思』中国国際広播出版社(奥付破損 後記は2007.4.10)

于 曉妮 20世紀初頭の中国における印刷技術の近代化とその月份牌への影響 『申報』の記事と広告を基本資料として 『表現文化研究』10巻1号 神戸大学表現文化研究会2010.11.15

陳 建男 清末台湾の中国古典小説接受以士紳の小説閲読為考察 『文学台湾』76期 2010.10.15

韓 振剛 清末民初教科書知見概述(下) 『出版史料』2010年第4期(新総第36期)2010.12.25

張 偉 近代第一部《伊索寓言》訳本 『出版史料』2010年第4期(新総第36期) 2010.12.25

張 治 林訳小説中“最不必訳”の兩種 ウェブサイト「林紓文化研究所Blog福建工程学院」2010.8.1電字版

蘇 建新 2009年林紓研究述評 『閩江学院学報』第31巻第6期 2010.11.25

付 建舟 “近現代轉型時期中国文学”：一個新的文学史概念 『中国文学研究』第15輯2010.6

陳建功主編 『唐改蔵書・図書総録』北京・文化藝術出版社2010.10

『中国現代文学研究叢刊』2010年第5期(総第136期)2010.9.15

清末民初短篇小説叙事初探……張 勳

清末民初：中国現代児童文学の起源……孫建国

《新青年》与中国現代児童文学の発生……王黎君

『中国現代文学研究叢刊』2010年第6期(総第137期)2010.11.15

近代来華伝教士訳介成長小説述略……宋莉華

在“現代性”理論框架中的“晚清”对近代小説研究近況の考察……唐宏峰

論魯迅文学觀念の複雜性 兼及鴛鴦蝴蝶派的評價問題……樂梅健

『明清小説研究』2010年第4期(総第98期)2010発行月日不記

韓南对中国近代小説的研究……顧 鈞

従報刊媒体影響看王韜の小説……張袁月

《晚清小説目錄》指瑕……王 鑫

晚清留日学生刊物与小説刊載……李亜娟

《惨世界》：啓蒙文本的根本性闕失……劉 雲